

3 授業「峠」(真壁 仁) PTA授業参観

(1) 【授業記録】

主題 「峠を越えて」

資料 詩「峠」(真壁 仁)

1991年4月21日(日)

板野中学校3年B組

T₁ 「峠」という詩を3年生一番最初の参観授業に選びました。この詩については3年生になったときに先生自身が思うことをいろいろ話したんですけど、3年生になったときの気持ちや今の気持ちをこの詩と今一度重ねてみて、みんな自身がそれぞれに思うことを語り合いたいと思います。今一度この「峠」の詩をみんなと味わってみたいと思います。

(詩「峠」を読む。)

峠は決定をしいるところだ。

峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。

峠路をのぼりつめたものは

のしかかってくる天碧に身をさらし

やがてそれを背にする。

風景はそこで綴じあっているが

ひとつをうしなうことなしに

別個の風景にはいつてゆけない。

大きな喪失にたえてのみ

あたらしい世界がひらける。

峠にたつとき

すぎ来しみちはなつかしく

ひらけくるみちはたのしい。

みちはこたえない。

みちはかぎりなくさそうばかりだ。

峠のうえの空はあこがれのようにあまい。

たとえ行手がきまっても

ひとはそこで

ひとつの世界にわかれねばならぬ。

そのおもいをうずめるため

たびびとはゆつくり小便をしたり

摘みくさをしたり

たばこをくゆらしたりして

見えるかぎりの風景を眼におさめる。

T₂ もう3年生になって2週間近くが過ぎました。3年生のスタート、この詩を味わってみて、

みんなの心の中にはどんな思いがこみ上げてきましたか。僕はこう思うんだ、私はこう思うんだという部分をできるだけ多くの人に語ってほしいと思います。

井上（男）「峠」を読んで、何か自分に欠けていたものが見えてきたような気がします。僕の中にはどうしても昔はよかったなあという思いが残って、今を大切に努力することを忘れがちになります。この詩は次の目標に向かって「あたらしい世界」に入っても頑張っていこうとアドバイスしてくれたような気がします。

T 3。今の井上君の思いにつなげて発表してください。

井上（女）この詩を初めて読んだ3年生になったばかりの頃は、結構2年生のクラスが好きだった、3年生になって不安だったんです。何か2年生のときあれだけいいクラスができたのに、3年生になってどんなクラスになるんだろうと思ったけど、この詩を読んでいくうちにやっぱり自分でも頑張っていかなあかんと思って、私自身が頑張っていくことによって、3年生のクラスも今まで以上にすばらしいものにしていけるんだという勇気づけを、この詩はしてくれているみたいです。

T 4。はい、ありがとう。思いを重ねていきましょう。手を上げて発表するのと、ただ当てられて発表するのでは全然違う。みんなの主体的な行動でこの授業を盛り上げていきましょう。

姫田（男）峠に登ったら、昔のことが見えてきて、その中には過去の過ちとか、そんなものが見えてきて、これからもっと頑張っていかなあかんあという感じがしてきます。

村山（男）この「峠」の詩は2年生のときも学習したと思います。2年生のときにはいろいろなことがあって、いやになったこともたくさんあったけど、いつもこの詩によって何というか勇気づけられて、何となくだけこの峠みたいなものを越えてこれたような気がします。峠に登ると歩いてきた道を振り返ることもできるし、これから先の未来のこととかも考えることができると思います。過去にあったいやなこととか、間違ったこととかを峠に立つ度に、バネとして頑張っていければいいなと思います。

T 5。村山君が読んだ「峠」の詩ですね。一人一人の思いにみんなの思いをつなげていきましょう。

漆原（男）感じのとてもいい詩だなと思っていたんですが、はじめはなかなか意味がつかめませんでした。峠を僕たちのこれからの人生にたとえているんだなあと思います。

T 6。私自身が思うことですが、私はこの詩と出会ってもう10年近くになります。毎年、ある時期がくるとこの詩を思い出すし、生活のいろんな場面で励まされてきた詩なんです。この詩全体に寄せて、みんなはどのような感じを持ちましたか。

稲井（女）峠というものは私たちの心の中にもたくさんあって、その峠を越えていくたびに私たちは強くなっていくんだと思います。それで、その峠を登りつめたとき、自分はこれからどうなっていくのか、今までの自分を通してこれからの自分を考えていくんだなあと思いました。

T 7。私にとって最も心が動いたのは、「ひとつをうしなうことなしに、別個の風景にはいつて

いけない。大きな喪失にたえてのみ、あたらしい世界がひらける。」というところですよ。何人かの人が2年生から3年生に学年が進んだことと、この詩を重ねて発表してくれましたけど、今一度「大きな喪失にたえてのみ、あたらしい世界が開ける。」という場面と、今みんなが3年B組という新しいクラスに出会ったことを重ねて思うことを出し合いたいと思います。

中山（女）私は2年生のときも森口先生の担任でした。とても仲のよい子が何人かいて、はっきり言って3年になってばらばらになることがいやでした。けど3年になってまだ少ししかたっていないけど、こんなわずかな期間なのに仲よくなった子がいっぱいいます。2年生のクラスがばらばらになって、3年生のクラスができた。「ひとつをうしなうことなしに、別個の風景にはいつていけない。」というのはこういうことだと思います。

T。今の中山さんの思いにつなげてください。

佐々木（女）私も中山さんの意見に似ているけど、私も中学2年のときに仲よくなった友だちと別れてしまったけど、このクラスにも仲のよい友だちがいて、このクラスでも何か新しいものが見つけられたらいいのになと思います。

久保（男）2年生のクラスは楽しかったけど、その分また友だちとかと別れるのはつらかったです。だけど3年生ではまた新しい友だちとかに会うことができてよかったと思います。

新野（男）僕も久保君によく似ていて、2年生のときはとても楽しくて、友だちもたくさんいたけど、今はばらばらになってちょっと残念に思います。

T。みんないろんな思いを引きずっていると思います。お互いの思いを確かめ合いたいと思います。つなげてください。

森川（男）みんなとよく似ていて、2年生のときにいつしよのクラスになれて、楽しくやれてきた友だちと別れて3年生になったけど、また新しい友だちができたので嬉しく思っています。

斎藤（女）みんなが新しいクラスでスタートを切ったけど、2年生とのきとはまた違う雰囲気になったけど、みんな頑張っていけると思います。

楠本（女）新しいクラスになって、仲のよい友だちともいつしよになれなかったけど、自分自身これから3年B組の中で、いろいろな子と友だちになっていきたいと思います。そして自分のことを打ち明けられるような友だちをつくっていききたいと思います。

中羽（男）ぼくは2年B組で森口先生といつしよのクラスで勉強してきたけど、いろいろ周りの子に迷惑をかけてきて、先生にもいろいろ迷惑をかけてきたけど、その度に森口先生が励ましてくれて、その度に新しい世界が開けて頑張ってきたように思います。

T。これからも新しい世界が開けていくように頑張っていこうな。

井上（女）何か大人びた言い方になるけど、人間というのは誰かに迷惑をかけて生きているように思うんです。中羽君が迷惑をかけてきたというけど、私もものすごく迷惑をかけて生きてきたと思うんです。ほなけん。今度は人が迷惑をかけたんとかをカバーできるような良いクラスにしたいなと思います。

T₁₁ 今、中羽君と井上さんが言うてくれたけど、人間というのはお互い迷惑をかけたり、支え合ったりして生きていると思うんです。今、早朝の学習を7時20分からしていることもそうだと思うんです。6時45分に家を出るんですけど、疲れてきていやになりかけることがあるんです。名田橋の上が混んでいらいらするときもあるんです。そのときにみんなの頑張りを思うんです。板野中学校が近づいたところで、自転車を一生懸命走らせるみんなの姿を見つけたときなんかは、ほんまに嬉しくなるんです。「今日もきてよかったなあ」「遅れんときでよかったなあ」「みんながいるからこんなに頑張らないかんというエネルギーもできるんじゃないなあ」と思うんです。毎日の生活の中でしんどいときがあります。今までの生活の中においても苦しかったことが数限りなくありました。そのときがきたらいつも思うのが、「今が峠じゃ、ここで頑張らないかんのじゃ」という思いと、「あいつも頑張っている、あの子も頑張っている」という仲間への思いなんです。みんなはどうでしょうか。

加藤（女）私は2年のときの友だちと、ものすごく仲がよかって最初いだったけど、今はこのクラスでよかったと思うようになりました。

太田（女）私も新しいクラスに変わった最初のときは、2年生のときの方がよかったと思ったときもあったけど、今は友だちもできたし、毎日楽しく学校にきているので、前のクラス以上に仲よくなれたらいいのになあと思いました。

T₁₂ どうしても人間というのは過去を引きずります。私自身もやっぱり過去を引きずり続けてきました。中学校に入学した頃、おやまの大将でいた小学校時代にもどりたいと思い続けていたように思います。今度中学を卒業して、高校に進学したらしたで、柔道に自分の生活すべてをぶつけてきた中学時代がすばらしかったように見えてきて、高校での生活に打ち込めなかったことを思い出します。人間には今まで歩んできた道の方がよかったように見えてきて、人生の峠を越えていくことがなかなかできない弱さがあると思うんです。高校から大学へ進んだときも同じような思いがあったと思います。そして、大学を卒業して就職したときもそうだったと思います。当時を振り返るとまさしく「峠」の詩そのもののように思えてきます。「大きな喪失にたえてのみ、あたらしい世界がひらける。」今までの人生のすべてが峠であり、その一日一日がひたむきに峠を越えていく瞬間であつたと思います。そして、これからの人生も人生の峠をしっかりと越えながら、人間として成長していくんだなあと思うんです。この「峠」の詩と出会ってそのことを思うようになってきました。そして、今の生活、新しい生活を精一杯頑張ることが、昔かかわった友だち、かつて出会った友だちを大切にしていくことにつながっていくように思うんです。私は今しみじみと思います。中学時代、高校時代、大学時代、それぞれの時代に出会い青春という時代を共に謳歌した仲間の存在をより輝いたものにしていくために、私の今の生活を生命の限り、精一杯生きなければならない。そんなことを思うんです。

T₁₃ 一生懸命峠路を登りつめて旅人は、峠に立ったところで次のような行動をとっています。「たびびとはゆつくり小便をしたり、摘みくさをしたり、たばこをくゆらしたりして、見え

るかぎりの風景を眼におさめる。」今まで苦勞して苦勞して歩いてきた中学2年生のクラス、その中で本当に楽しいことがあったし、嬉しいこともあった。その思いを今じっくり峠の上に立ってかみしめる。心穏やかに今までのこと今までの道のりをかみしめる。じっくりと考える。そして、今までの道のりや一つ一つの場面を自分の心にしっかりと焼き付けていく。奥歯をかみしめかみしめ頑張ってきた今までの思いを捨てるのではない。今まで頑張ってきた思いを峠の上でじっくりとかみしめていく。そしてこれからの道のり、この中学3年という大きな峠に向けて歩いていく。今中学2年と中学3年の両方が見える峠の上で、新たな道のりを精一杯に頑張っていくという思いを込める。そして、これからの生活、今の生活を頑張っていく。そのことを最後の4行に寄せていつも思ってきました。どうでしょうか。みんなはどのように感じたでしょうか。みんなの思いを語り合しましょう。

中羽(男) その旅人は、今の僕たちとよく似ていると思います。それはこれからの僕らは高校受験という大きな峠がある。だから今まで学んできたことをもう一度ゆっくり振り返り、これからの生き方を考えていきたいと思います。

中山(女) やっぱりそれぞれの場面に別れがあると思います。それはとてもつらいことだと思います。この旅人も、その風景から別れなければならない。だから旅人は少しでも長くその風景といつしよにいたいから、いろんなことをして見える限りの風景を目におさめているんだと思います。

T₁₄ 今の二人の思いにつなげてみてください。みんなが思うことを自由に語り合える。そんな雰囲気大切にしていきたいと思うんです。

井上(女) 私もみんなが言ったことと同じなんですけど、人生にはそのときどきに苦勞や悲しみがあつて、いろんな場面でその苦勞や悲しみがバネになっていき、人間としてたくましくなっていくと思います。ほなけん、旅人も登ったことに意義があると思うし、私たちも頑張っていくことに意義があるんだと思います。

T₁₅ 峠の上で今まで頑張ってきた思いをかみしめる。そしてこれからの道のりも新たに頑張っていくんだという決意をしていく。「峠は決定をしいる」というこの決定とは、決意するという感じがしますね。どうでしょうか。

村山(男) 旅人は峠の上に立って、その周りに見える風景を見おさめていたと思います。その周りの風景を見おさめるということは、峠に立てば過去のこと、今まで歩んできた道のりを見つめ直すことができ、これから先の道のりを頑張っていくバネになっていくと思います。だから、この峠に立つことは大変だけど、人間としてとても大切なことなんだと思います。

井上(女) 峠に立ったら、また別の峠も見えると思うんです。そのとき旅人は、頂上に立つことはこんなによいことがあるのかと思い、今まで登ってきてよかったと思って、少しの間はその喜びに浸っていたいと思うんです。でもその峠から次の峠が見えてきて、今度はより大きな喜びやさわやかさを求めて次の峠を目指して歩いていくように思うんです。結局人生も同じで一つの喜びをつかんだら、その喜びをより大きくするためにまた頑張っていく。生きる

ということは、ずっと喜びを求めて峠を登り続けることなんだろうと思うんです。

中山（女）私も井上さんとよく似ていて、峠を登るときは過去のことは見えるけど、未来のことは見えないと思うんです。でも峠を登りつめたときは過去も未来もその両方が見えてくと思うんです。そして、峠を下るときは未来は見えるけど過去は見えなくなっていくと思います。やっぱり峠の上というのは、過去と未来という両方の風景が見える。過去と未来の両方の風景が閉じあっているところなんだろうと思います。また峠に登ったとき未来が見えてくると同時にいくつもの峠が見えてきて、旅人もやっぱり頂上で今度はあの峠に向けて頑張ろうと決意していくんだと思います。

T₁。私にとってこの詩は新しいことが始まっていくたびに、心の中で幾度も幾度も反芻してきた詩です。私の結婚式のとき披露宴の最後の挨拶のときも、この「峠」の詩についての思いをしみじみと語りました。この詩は私の生活すべてに染み込んでいます。この「峠」の詩、この中には2年生のときも学年の始めに勉強したという人も何人かいると思います。中学2年で読んだ「峠」の詩と、中学3年で読んだ「峠」の詩と、2年生での1年間の流れを振り返ってみなは、どんなことを思いますか。また、今年初めてこの詩と出会った人、中学3年という人生の大きな峠に差し掛かる自分の思いと、この詩に込められて願いを重ねてどのようなことを思いますか。今中学3年生のスタートラインに立った自分と、この「峠」の詩とを重ねて思うこと、この「峠」の詩が自分に訴えるもの、みんな自身に聞かせるものをこの学習のまとめとして語り合いたいと思います。

井上（女）私は根性がないから、峠に登っていくことはものすごくしんどいと思うんです。私一人だったら登れないかもしれないと思うんです。でもみんなで励まし合ったり支え合ったりして登っていったら、どんなに険しい峠であっても、みんなで楽しく笑顔で登っていけると思うんです。みんなで声を掛け合って頑張っていくことによって、どんなに険しい峠もなだらかな平坦な道のりのように感じていけると思うんです。そして、その峠に登って、今度はその峠を下っていくとき、下りの道は楽だから自分一人たったかたったか行きそうで、そして今度の新しい峠のとき、また一人になってしまうから、どんなときでもみんなでいろいろな思いを語り合って励まし合いながら、この1年間頑張っていきたいと思うんです。

中山（女）この「峠」の詩は2年生のときにも学習したけど、とても奥深いものがこの詩の中には流れているように思います。読む人それぞれの感じ方が違うので難しいと思いました。この「峠」の詩を読んで自分を振り返ると、思い当たることがたくさんあります。私たちはこれからの人生を生きていく中で、いくつもの峠を越えていかなければならないと思います。私は今までにそんな大きな峠を越えたことがないけど、これから先いくつもの峠が待ち構えていると思うから、頑張ってこつこつと一つ一つの峠を登っていきたいと思います。それとさつき井上さんが、何か自分は根性なしと言っていたけど、私は井上さんはそんなことはないと思う。やっぱりみんなをまとめる力があるし、いっしょにおつても楽しいから、井上さんはすごいなあと思います。

井上（男）僕はちょっと感想が違うんだけど、頂上は登っていくときは、そこにいくという同じ目標があるけど、下るときはそれぞれ違う道があつて一人一人違う道を下っていくように思います。みんなで励まし合つて頂上に立つたとき、みんな一人一人の新しい道が開けてくるとおもうんです。その一人一人にあつた道をしっかりと見つけて、みんなが励まし合つて一人一人の人生を精一杯生きていかなければならないんだと思います。

T₁₇ みんなの心の中に響く「峠」の詩の一節一節があると思います。みんなの思いを語り合つて、この詩に寄せる思いを深めていきたいと思います。

村山（男）2年生のときも「峠」の詩を読んだけど、そのときは意味がはっきりつかめなかったけど、段々とこの詩についての思いは深まってきたように思います。そして、そのときそのときによつて、この「峠」の詩についての感想も変わってきたように思います。この中学3年には僕たちの今までの人生で最大の峠が待ち構えていると思います。この峠を自分の力で乗り越えられればと思っています。

井上（女）みんなのいろんな意見から思つたんだけど、同じ峠でも自分の気持ちによつて、この峠はしんどいと思つたり、またこの峠は楽しいと思つたりするから、どっちみち一度しかない人生なんだから、楽しいと思いながら登っていきたいと思うんです。だから人生はどんなときでも自分の気持ちしだいで、やりがいを感じることができたり、嫌々になつたりしていくと思うんです。私は何でも物事の考え方を良い方に考えていきたいし、自分で自分を励ましながらかつていきたいと思っています。

小川（女）この「峠」の詩を読んで、この1年が私にとってとても大切な1年なんだと思えてきました。私たちの前には高校入試という大きな峠が待っているの、その峠に向かって一日一日を精一杯歩いていくんだという気持ちで勉強していききたいと思います。

T₁₆ この1年を見つめて思うこと、みんなの思いを重ねていきましょう。

藤田（男）最後の旅人みたいに、やっぱり苦しんで登った峠だから、そんなさわやかな満足感が込み上げてくると思います。だからこれから進んでいく道のりにとつても、今まで頑張ってきたことは大きな力になっていくと思うから、僕たちも受験という大きな峠を控えたときだから、もつともつと大きな力をつけていくために、これからの生活を頑張っていきたいと思っています。

井上（男）やっぱり峠というのはつらいけど、つらいことがあるから楽しいことも見えてくると思います。部活動でもつらい練習を頑張つて鍛えていくから、勝った喜びが最高のものになっていくんだと思います。苦勞しながらも頑張り抜くからこそ、楽しさや喜びが生まれてくるんだと思います。

T₁₅ 今の井上君の発言に一つだけ言葉を添えてみます。これは佐藤文彦先生からいただいた言葉です。私たちは苦しいことや悲しいこと、人はさまざまな状況の中で生きていると思います。佐藤先生はこう言われました。「一人の仲間の悲しみをみんなで幸せに変えていく。一人の仲間の喜びをみんなで大きな喜びにしていく。」部活動の話で井上君が、今、出してく

れました。私は中学時代よりずっと柔道をしてきました。投げたり投げられたり、本当に厳しい練習に明け暮れた時代があります。「いつやめようか、いつやめようか」と思った頃もありました。でも決してやめることはなかった。どうしてか。仲間がいたからです。声を掛け合い、励まし支え合った仲間がいたから、厳しくつらい練習を頑張ってこれたと思うんです。仲間という存在は不思議です。本来苦しいはずのことが、仲間の励ましの中で頑張っていけば、いつしかほのぼのとした喜びや楽しみに変わってきます。人生とはそんなものでないだろうかと思ったりします。

井上（女）井上君の意見を聞いていて思ったんだけど、峠というのは私たちの生活しているところに例えたら、峠を登っていく道のりの途中には人家があると思うんです。峠を登っていて苦しくなったら、その人家ですつと休みたいという気持ちも起こってくると思うんです。でもその人家ですつと休んでいたら、今度は段々と弱い心が起こってきて無理して峠や登らんでもいいという気持ちが起こってくると思うんです。その弱い心に負けて人家にずっといたら、峠の頂上に何があるのかも、峠の上にどんな世界が開けているのかも知らないままで一生が終わっていくと思うんです。人間にはどんな困難なことであっても、どんな苦しいことであっても、前向きに頑張っていくチャレンジ精神というものが必要であり、頑張り抜くことによって本当の喜びをつかむことができるということを、井上君は言ってくれたように思います。

中山（女）井上君がさつき峠を登るときは、みんなで頑張って励まし合いながらいつしよに登っていくけど、降りるときはそれぞれの道を降りていくようになると言っただけど、みんなそれぞれの道を降りたとしても、やっぱり先に大きな峠が見えたら、また願いを同じように持つ仲間と力を合わせて、励まし合って登るようになっていくんだなあと思いました。

井上（男）どんなときも人間は、力を合わせて生きていくことが必要なんだけど、やっぱり自分がどのような峠に向かって進んでいくかの決断をくだすのは自分で、自分の進むべき道をしつかりと決定するという強い意思があるからこそ、人は励まし合ったり支え合って頑張り抜くことができるようになるんだと思います。

T₂₀ みんながそれぞれにとらえた「峠」の詩を大切にしていきたい。この1年みんなはさまざまな思いの中で揺れ続けるだろう。そのときにこの「峠」の詩を何度も何度も読み返してほしい。いや、この1年だけではない。これからの人生においてさまざまな困難な状況に立つことがあろう。そのときいつも心の中でこの「峠」の詩の一節一節が浮かんでくる。みんなにとってそんな「峠」の詩であってほしい。そして、今日語り合ったこと、3年生になっての一番最初の道徳の時間に、「峠」の詩を学びみんなの思いを出し合ったこと。本当に大事にしていきたい。時間がきてしまったけど、これからもつとめつとみんなの熱い思いを語り合う授業、みんなで作くりあげていきましょう。終わります。

(2) 【資料】

峠

真壁 仁

峠は決定をしいるところだ。
峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。
峠路をのぼりつめたものは
のしかかってくる天碧に身をさらし
やがてそれを背にする。
風景はそこで綴じあっているが
ひとつをうしなうことなしに
別個の風景にはいつてゆけない。
大きな喪失にたえてのみ
あたらしい世界がひらける。
峠にたつとき
すぎ来しみちはなつかしく
ひらけくるみちはたのしい。
みちはこたえない。
みちはかぎりなくさそうばかりだ。
峠のうえの空はあこがれのようにあまい。
たとえ行手がきまっても
ひとはそこで
ひとつの世界にわかれねばならぬ。
そのおもいをうずめるため
たびびとはゆつくり小便をしたり
摘みくさをしたり
たばこをくゆらしたりして
見えるかぎりの風景を眼におさめる。

真壁 仁（まかべ・じん）

1907年生れ。「日本の湿った風土について」（1958年）のなかの一編。

山形市に住み、第一詩集「街の百姓」以来、東北の風土・農村に密着した詩作を発表する。